別紙様式３

平成３０年度　【　学園研究費助成金＜ Ｂ ＞　】研究成果報告書

学部名　人間関係学部

ﾌﾘｶﾞﾅ　ミウラ　タカヒロ
氏　名　三浦　隆宏

研究期間　平成３０年度

研究課題名　アーレントとベンヤミン、デリダの比較思想史研究

研究組織

	氏　　名	学　　部	職　　位
研究代表者	三浦　隆宏	人間関係学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

１．本研究開始の背景や目的等（200 字～300 字程度で記述）

生涯半ばでその命を絶ったにもかかわらず、ヴァルター・ベンヤミンの思想は、いまなお多くの人々を惹きつける光源の一つであり続けている。この国のベンヤミン研究に限っても、美学や映像文化論といった、従来のドイツ文学・思想とは異なる分野の研究者らによる新たな研究成果が続々と生み出されている。このような背景を踏まえ、本研究は、ベンヤミンの思想を戦後の米国社会に伝える立役者でもあった政治思想家・アーレントと、「ベンヤミンの個人名」（『法の力』所収）という論考をもつ脱構築の哲学者・デリダという二人のユダヤ系思想家を補助線として引くことで、従来とは異なるベンヤミン像を描き出すとともに、「歴史」「暴力」「赦し」といった思想史上のテーマに対して、新たな視野を切り拓くことを目的とした。

２．研究方法等（300 字程度で記述）

以下のような手順による文献研究によって研究を進める方針をとった。

まずは、アーレントのベンヤミン論（『暗い時代の人々』所収）を読解することで、彼女の視点から見たベンヤミンの思考の特徴を掴むとともに、両者の「歴史」論（アーレントは「歴史の概念」、ベンヤミンは「歴史哲学テーゼ」）を読み解き、その内実を比較検討する。

ついでデリダのベンヤミン論を読解したうえで、デリダがベンヤミンの『暴力批判論』と『言語一般および人間の言語について』をどのように読んだのか、その解釈の特徴を浮き彫りにする。そして、アーレントの暴力論の特徴を整理したうえで、それをベンヤミンの暴力論と比較する。最後にベンヤミンを介することで、アーレントとデリダの共通点を浮かび上がらせ、その共通点（たとえば「赦し」の概念）の内実をユダヤ性という観点から論じる論文を執筆する。

３．研究成果の概要（600 字～800 字程度で記述）

６月末に刊行された『思想』（岩波書店）の特集が「ヴァルター・ベンヤミン」であり、そこに収録された論文を精読することで、ベンヤミン研究の現状を把握することができた。また、２の研究方法で挙げたアーレントのベンヤミン論やデリダのベンヤミン論を精読し、研究ノートを作成した。その結果、アーレントの「観客」とベンヤミンの「フラヌール」の概念が類似性をもつこと、およびベンヤミンの絶筆として知られる「歴史哲学テーゼ」をめぐる思想史上の一コマについて、５の研究成果で挙げる一つ目の論文のなかでふれることができた（とはいえ、前者は註での言及、後者は今後の研究への予告的な記述にとどまっている）。

しかしながら、１の研究目的で述べた新たなベンヤミン像の提示（具体的に言うならば論文の執筆）には至ることができなかった。その理由としては、７月のオウム真理教幹部ら 13 名の死刑執行を受けて、教団幹部らが陥った「悪」の実相を検討する論文の執筆を優先させたことが挙げられる。幸い、これはアーレントによるアイヒマン裁判の報告と村上春樹氏による地下鉄サリン事件被害者らへの長大なインタビュー集という「ふたつのルポ」を重ね合わせることで浮上する「悪」について考察した論文として発表することができた（５の研究成果の二つ目の論文がこれにあたる）。また、死刑制度についての考えを深めるために、デリダの「死刑」の講義録を読み進め、研究ノートを作ることができた。

現時点では、「アーレントとベンヤミン、デリダ」の組み合わせ以上に、「アーレントとベンヤミン、カフカ」の組み合わせに関心を抱いており、来年度はカフカ（なお、彼もユダヤ人である）を軸に研究を進めることで、カフカとアーレントを介して、従来とは異なるベンヤミン像の一端を描き出す論文を複数発表できるように努めていきたい。

４．キーワード（本研究のキーワードを１以上８以内で記載）

①　ベンヤミン	②　アーレント	③観客とフラヌール	④　悪
⑤　死刑	⑥	⑦	⑧

５．研究成果及び今後の展望（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他○名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

・論文、三浦隆宏「観客と歴史家――あるいは傍観者、詩人、物語作家らをめぐって」
『椙山女学園大学研究論集』第 50 号（人文科学篇）、33-45 頁、2019 年 3 月

・論文、三浦隆宏「「悪」をめぐるふたつのルポ――アーレントと村上春樹が向き合ったもの」
『人間関係学研究』第 17 号、椙山女学園大学人間関係学部、87-100 頁、2019 年 3 月

・論文、三浦隆宏「薄明かりの〈平等〉――アーレントの政治的平等論の射程」
『中部哲学会年報』第 50 号、中部哲学会編、頁数未定、2019 年 4 月（予定）